

令和元年度第2回 胎内市総合計画等審議会 議事要旨

1. 日時

令和2年1月24日（金）18：15～20：15

2. 場所

胎内市役所 2階大会議室

3. 出席者

【胎内市総合計画等審議会委員】

高橋三樹男委員、高田岳人委員、西濟睦美委員、今本啓介委員、伊藤祐太委員、長濱一彦委員、近満寿彦委員、渡邊俊一委員、安城守英委員

【事務局】

総合政策課長、総合政策課企画政策係長、係員

4. 議事内容

事務局より資料に沿って説明を行った後、人口ビジョン及び総合戦略素案について各委員から発言。主な発言内容は下記のとおり。

＜胎内市人口ビジョンについて＞

○34ページに出ている年度ごとの人口の数字について、総人口の将来展望の2020年28,978という数字はどの時点のことか。12月31日か。

今年の10月で28,978もしくは28,709としているが、今はほぼ近い数字か、既に下回っている。この状況に危機感を持って取り組まなければいけない。

また7ページの2017年の出生数が170と落ちているので2018年、2019年とどうなってくるのか心配でいる。出生数が減っていることに対し市から出ていく人数が多いというのは、まちにとどまりたいと思える魅力がないことに要因があるのではないか。今後5年10年と期間をもって施策に取り組んでいかなければ減少に歯止めをかけることはできないのではないか。

26ページの「進学などで胎内市をはなれても就職などのタイミングで胎内市に戻って住みたいか」というアンケート調査では小学生、中学生の回答で「どちらともいえない」としている子が大変多い。胎内市に住んでいたいと感じさせる、例えば両親のそばに住んでいられる等の魅力を出していけば結果が変わってくる可能性があるのではないか。35ページの人口ピラミッドから20歳から24歳の若者が進学か就職のタイミングで胎内市を出ていることがわかるが、踏みとどらせるためにはアンケートで「どちらともいえない」と今回答えている子供たちの心をつかむことと、それに対し社会がうまくかみ合うことで歯止めということにつながるのではないか。

まだまだ人口の流出を止められる可能性があるなかで、子供や、子供を支援する親や地域に対する施策というのが一つのカギとなるのではないか。

〔確かにデータをみると「どちらともいえない」と回答している子が多く、その子供たちに働きかけていくことは非常に大切なことであり、また、20代の方に向けた胎内市に残ってもらうための魅力の発信や就職の受け入れ先の紹介等をしていくことが必要であると感じると事務局回答〕

○20 ページの「県内市町村の将来人口における社会増減」では、新潟市、聖籠町が上位にきている。それだけ人を取り込む魅力があり、施策をしているのではないかと。粟島浦村でさえも上位にあるということは、人口が少なく自然の豊かな土地で住んでいこうとする人を取り込んでいる可能性もある。他の地域がどのような施策をしているのか、どのような魅力を発信しているのかを参考にデータに現れる差の要因を見極めていくことにも考えるためのヒントがあるのではないかと。

〔特に粟島浦村は島であることを生かした施策や、国からの補助を受けた取組をしていたこともあり、今回の位置づけになったという部分もある。他の事例をみながら真似ることができるところは真似していきたいと事務局回答〕

○未婚の人が増えている状況だが、「なぜ未婚率が高くなっているのか」という問題を解決していかなければ未婚率を下げることはできないのではないかと。例えば、女性が社会で活躍するようになり、中にはわざわざ結婚をする必要はないと考えている人もいるのではないかと。また、男性としても給料がなかなか上がらないこともあり、経済的な不安から結婚に踏み切れないということがあるのではないかと。何か問題があることで未婚の方が多いのではないかと思うので、未婚率を改善するためには、その問題を解決する手立てが必要だと考えている。

〔価値観が多様化してきているので、例えば同性という方が楽だという方であったり、結婚を必要としない方であったり、そういった方の価値観も大切にしつつ、結婚したい人が結婚できる環境づくりを進めていくことで婚姻数を増やしていければよいのではないかと考えていると事務局回答〕

○25 ページの「居住継続意向に関する調査」では「ずっと住みたい」と回答している人が50～59歳で減るのには何か理由があるのか。

○回答している人が男性か女性かで変わってくると思うが、例えば定年を前にしてこのまま同じ土地に住むかどうかということや、お孫さんができるような年代でもあるので同居するために転出を考えている等、体力面、精神面を考慮しても50代辺りで悩むためではないかと想像する。

○31 ページの暮らしやすい点の中で「豊かな自然がある」ということで、暮らしにくい点は「雪が降る」「気候が良くない」。片方ではいいけれど、一方では良くないというところをどうしていくか。逆手に取るのか。

○自然が豊かだが、余暇が楽しめる場が不足しているということは、まさに遊び下手。余暇を楽しむ場をうまく提供できれば、自然をもっと楽しむことにつながるのではないかと。雪が嫌いという点をどう解消するか。皆さんで知恵を絞れば「暮らしやすい」ではないが、「暮らしていくのも好きだ」へ変えていけるのではないかと。そういう意味では「余暇を楽しむ場が充実している」が「暮らしやすい」のところちょっと低い。「暮らしやすい」と「暮らしにくい」の相関関係を上手く考えれば、ヒントがあるような気がする。

〔参考にさせていただくと事務局回答〕

＜第2期胎内市まち・ひと・しごと創生総合戦略について

○「人口減」が施策となっているが、今胎内市にあるクラレさんやジャムコさんのような企業に勤めている人の中には新潟、新発田、村上方面から来ている方もいると思うが、胎内市に定住してもらえるような施策、アピールはしているのか。

〔全体的に市外から入って来ていただけるような環境づくりをする中で、今おっしゃられたような

方達にも選択していただけるのではないかと考えていると事務局回答]

- 中心部だけに限らず、周辺集落にも目を配るような計画としてほしいが、市としてどのように考えているのか。

[地域の意向も尊重しながら考えていくと事務局回答]

- 市内でも外国人労働者等を見かけるが、今後外国人対応等はどのようにしていくのか。呼び込んでいくとなると、学校教育をどのように行っていくのかなども検討しなければならないと思う。

[日本の企業の中には、あらかじめ日本の文化や言葉を教えた中で働かせるというところもあるようだが、そういう部分が十分手当されていなければ日本に来て働こうと思っても孤立化してしまうという懸念はありと事務局回答]

- 外国人登録者数を把握しているか。また、受付窓口での対応は十分にできているか。

[およそ 230 人程度で窓口での手続きは世話人がついてくるので問題ないがその後の情報伝達に懸念があると事務局回答]

- 外国人を受け入れる、インバウンドで来る観光客を取り込むとしても、多く来ていると聞く台湾の方が街歩きをしていて分かる中国語表記があるかと言ったらあまり見受けられない。魅力を発信する資料もパンフレットもあるのであれば、きっちり出すべき。

- SDGs を市の政策に入れていけば、市役所の方がこのアイコンを使っている、市民の方がまず SDGs が分からなくて馴染めない。これからやっていく施策の中に書いてあるが、これはもう少し細かく身近な、例えば海に行って海の豊かさを守ろうという看板を出すとか、太陽光発電や風力発電がクリーンエネルギーとリンクしているなど、胎内市は一生懸命考えていて、そのプレートを見れば、これが SDGs の一つというふうになるようにつなげていかないといけないと考える。「SDGs は何」と市報でやってもなかなか難しいのでは。若い人も関心がないだろう。使うのであれば、胎内市は SDGs を上手く使っている先進行政区と思わせるような使い方を。どんどん使っていけばいいから使っていく。例えば、企業であれば「企業それぞれが作る責任、使う責任」といったような会社の正門の近くに貼ってもらうとか。街角で「胎内市って SDGs に取り組んでいる」と思わせるようにすれば、皆さん意識が上がって、胎内は考えて世界の中でも SDGs に取り組んでいる市だと思わせる仕組みを作れるのではないかと。これを活用してみなさんに浸透して、ご年配の方も SDGs が分かるように、それぞれ市報の中で一つ一つテーマを扱う。このマークは今回このテーマで教育だとか、飢餓についてはこうしようとか食品ロスをなくしようとか「これが SDGs です」というのを市報の中で一つ一つ特集を組みながらやっていくのはどうか。

[まずは職員の理解促進から始めていきたいと事務局回答]

- 子育てに関して、出生率の低下は全国的なものだと思うが、胎内市に住んでいて安心して子供を産める環境かという点で産婦人科もなく助産施設もない。産んでからの保育園は待機児童もないくらいスカスカ。病児保育室もあり、産んでからの子育て施設はあるが、妊婦さんに対するサービスはあるのか。「胎内」の名にふさわしい安心して結婚・出産・子育てができる環境で、出産は女の人にとってとても大事という心配なことが多いが、妊婦さんへのサービスは何かあるのか。例えば、新潟では妊婦タクシーという、呼んだらすぐ来てくれるタクシーがあるが、胎内市では妊婦さんに対する、ここで子供を安心して産めるという場所がないと、やっぱり病院に少しでも近いような所がいいと思ったりする。

[委員がおっしゃるように医療的な部分では医院がないのは不安な部分だと思うと事務局回答]

○出生数からいって1クラス30人くらい。保育園、幼稚園から中学校3年生まで大体30人でずっと推移している。そうするとクラス替えもなく12年間一緒。東京や新潟市に比べて密度の濃いクラスメイトになる。そこはつながっているわけだから幼児教育から小中学校と一貫教育で胎内の魅力を発信というかたちで、もっと学校同士が交わって、胎内に住むとこんな教育が受けられて学力も上がり、胎内市内の小学校の6年生の学力が周りの市町村より高くなり、親御さん達が「どうして胎内は学力が高いのだろう」と言われるような取組をしていかないと、外から人は入ってこない。小中学校のコミュニティがあるなら、保育園まで幅を広げて一貫させる。例えば黒川と築地で留学生じゃないが、あっちの中学校に行ってみようとか、面白い発想があってもいいのでは。海と浜の人達が山の黒川の中学校にやると全然違うかもしれないし、それで胎内の良さを発見するかもしれない。幼稚園から中学校までの一貫教育と地区での交換留学をやれば10年、20年のスパンで見て「2030年には胎内市内の小学生の学力をここまで上げる」というような目標を立てるとか、そのためには学習方法をどうするか、地区ごとの先生も交流して勉強会をするなど刺激していけば、将来的には中条駅西口のようなベットタウンとして町が広がるのではないか。増えた人口に寄せて病院や産婦人科ができるかもしれないし、将来のプランを持ち込むこと。人数が少ないがゆえにできる良さがあるのではないか。

[今後の参考にさせていただくと事務局回答]